

実践報告 コロナ禍において歴史から学ぶ教材の開発と授業実践

関西大学非常勤講師 柴田 洋一

1. はじめに

筆者は地理歴史科・公民科の36年目の高校教師である。縁あって、母校であるA大学で、地理歴史科教育法Ⅱを担当して3年目である。令和2(2020)年度4～6月に、コロナ禍で全国的に学校休業が実施され、授業再開後も、勤務校では今までの学校生活ではなく、新しい生活様式を送ることを強いられた。それらは、今となっては馴染みとなった、マスク・消毒・3密を避ける、ソーシャル・ディスタンス、近くで大声を出さない、換気などである。しかし、子どもも大人も、確実に心が病み始めている。このような状況の中で、心を癒し、前を向いて生き続けるために、教育は何を伝えるべきなのか。

2. 目的

生徒・学生が、繰り返される歴史の循環性について学ぶことを通して、不確実な21世紀に生き抜くための資質・能力や希望に気づかせる。

3. 背景

筆者は、幼いころ、家族から話で、先祖が明治時代の末期に、北米西海岸のシアトル市へ出稼ぎ労働に出かけたことと知り、海外での生活に興味をもった。その関係で、1980年代半ば、A大学社会学部の学生であった筆者は、2つの研究テーマを持っていた。ひとつめは、社会心理学領域で、水平的空間移動における「異文化間移動のカルチャーショック・プロセスと心理的変化への対応」であった。グループ・ダイナミクス研究で有名な教授の指導の下、海外進出企業でのリーダーシップ研究における社会文化的背景の解明に役立てようとした。ふたつめは、歴史地理学領域で、垂直的歴史的变化における「北米への出稼ぎ移民の経験を含む family history と歴史地理的記録を照合する実証的研究」であった。今回の報告は、筆者のライフワーク的な研究を元に、コロナ禍において授業実践に発展させたものである。

筆者が振り返ると、先祖の話で覚えている最初が2歳で、朝食のオートミールは祖父がシアトルで覚えた食習慣を父が伝えられたという話だった。その後、父は曾祖父がシアトルで洋服店を開いたことや、円錐形の山を見る度に、シアトルの在留邦人が「タコマ富士」と呼んで日本を懐かしんだレーニア山の絵が実家にあったが、戦災で焼けたことを話してくれた。そして、野球のベーブ・ルースとキャッチボールした親戚がいると聞いたのが小学2年、宿題で先祖の話をも祖父に聞いたのが3年、戦争体験を父に聞いたのが4年、先祖探しのために社会科の先生になると宣言したのが5年、初めて曾祖父の店のあったシアトルを訪問したのが21歳、今までの墓参り以外で、先祖の故郷の福井県敦賀市・小浜市・佐分利村へと父親と巡ったのが23歳、本格的に先祖の記録を系図におこし、写真・戸籍・地図などを整理し、親戚からのインタビューを収集・文章化する中で、父のいとこの82歳のおばさんからアメリカの親戚を探してほしいと頼まれたのが40歳頃、そして、画像を含めて英語表現やナレーション・BGMを挿入した教材化が58歳となった。実に家族の歴史を辿ることは、筆者の生き甲斐のひとつであった。

4. 研究方法

4. 1 教材開発

着想のヒントは、約100年前に起きたスペイン風邪であった。しかし、先行研究として、スペイン風邪の惨禍を日系アメリカ人の視点で扱ったものを探そうとすることができなかった。そこで、教材開発の視点として、筆者は自身の先祖や親戚に起きた、出稼ぎ移民による国際間移動、過労やスペイン風邪による家族の死と不遇、戦後不況や排日移民法、世界恐慌・

自然災害から再び世界大戦の勃発、日系人強制収容所など、数十年に及ぶ一連の惨禍と結びつけた。人々は、さまざまな歴史の困難を、耐え忍び、諦めずに最善を尽くし、乗り越えて新たな歴史を刻んでいった。そのことを、歴史から学んで欲しい。その学びを、今のコロナ禍の私たちに置き換えて、ただ耐え忍ぶだけでなく、変化を捉えて、よりポジティブに進化する勇気を生徒や教職員にも持って欲しいと考えた。

そのような思いを込めて、筆者が B 大学連合教職大学院で作成した成果物に加筆・修正し、2 つの教材、「歴史から人生を学ぼう」と「HOW DO YOU THINK OF THIS SITUATION WITH CORONAVIRUS」として作成した。後日、3 つめの教材も試作した。写真資料は、自宅に保存していた古写真に、ネット上で公開されている画像で補った。画像と BGM の著作権に配慮して、営利を目的としない教育利用を念頭に、その出典を資料の掲載個所と末尾に示した。

各教材の概要は、以下の通りである。

教材 A「歴史から人生を学ぼう」

(高校での実践では約 6 分、その後、系図等を加筆して大学では約 10 分)

エピソード 1：明治末期の 1905 年、父親(筆者の曾祖父)が 38 歳で単身、横浜港から日本郵船の貨客船にてハワイ国経由で米国ワシントン州シアトル市に海外出稼ぎ移民へ。その後、ミシンと洋服の販売店を(パイン通りに)開き、妻と三女を呼び寄せた。長女の夫には在留邦人の中から同郷(福井県敦賀市)の青年を選んだ。彼は兄と渡米していた。夫にあたる青年が長女を迎えに行き、シアトル市で結婚後、アイダホ州モンペレー市に移住。夫は雑貨店、義兄は食堂と洗濯屋を営んだ。1916 年に過労で母親が亡くなった。三女が父親を支え、洋服店を日本街の繁華街(ジャクソン通り第 6 街)に移した。このころ、父親の友人が帰国するため、(パイン通りの)染織店を譲り受けた。長男や四女を呼び寄せたが、第 1 次世界大戦後の不況の影響で経営が行き詰まり、1922 年ころ、曾祖父家族は帰国した。

エピソード 2：スペイン風邪のために、1918 年に夫が亡くなり、妻(長女)は幼い姉妹を連れて帰国して夫の実家を頼った。しかし、義母とは折り合いが良くなく、長女を残して家を出て生家の祖父母(筆者の高祖父母)のもとに身を寄せた。離れ離れになった姉妹は成人して、大阪で(帰国していた祖父(筆者の曾祖父)の家で)再び共に暮らし、その後、それぞれに家族をもち、長生きした。しかし、父の記憶がなく、寂しい人生だった。1999 年、その姉に筆者が昔のアルバムを拝見に伺った。別れ際に、彼女から「死ぬ前にどうしても知りたいことがある。あなた、英語が分かるンやったら、アメリカで伯父さんの家族を探して、父の記憶を取り戻して欲しい」と必死に絞り出すように懇願された。このとき、筆者は広大な米国で離ればなれの親戚を手がかりもなく探すことに絶望感を感じた。まるで「太平洋に落とした 1 本の縫い針」を探すようなものだ。しかし、筆者は彼女の願いを遂げることに使命を感じ、可能性を信じて同姓の日系人の電話番号を JETRO や府立図書館の古い日系人電話帳から調べだし、国際電話をかけ続けた。

エピソード 3：2000 年、家族が別れて 80 年の歳月を経て伯父の遺族と連絡が取れた。喜びも束の間、筆者は伯父家族に想像を絶する辛い経験があったことを知った。コックだった父親(伯父)と高校生の長男は第 2 次世界大戦中、1942 年にアリゾナ州ポストン強制収容所に入れられた。母と弟とは収容所で再会した。母親と父親(伯父)が離婚したのは、弟が生まれてすぐで、長男はまだ幼く、「母は死んだ」と聞かされ、弟がいたことも長く

忘れていた。すでに母は再婚しており、戦争終結のあと収容所から何も告げずに姿を消した。父親は戦後すぐに亡くなった。父親の遺品は小さな証明写真1枚だけだった。遠縁の親戚とは、父親の葬儀以降、会わなくなった。しかし、残された長男は人生を諦めなかった。空軍のエンジニアとなり、結婚して多くの家族に恵まれて戦後の苦境を乗り越え、人としての幸せを掴んだ。並行して、行方知れずになった母親と弟のことはずっと気がかりだった。1990年には長男の息子がインターネットで母親と弟を探し出し、45年ぶりに再会できた。そして、母親は再会を終えて静かに亡くなった。2000年に筆者から知らされるまで、父親に弟がいたことや、その遺族が日本に生きていることも全く知らず、想像もしていなかった。

教材 B「HOW DO YOU THINK OF THIS SITUATION WITH CORONAVIRUS」

(約6分半)

100年に1度の感染症の大流行に、我々はどのように立ち向かうのか。取り囲む状況をネガティブに耐えるだけで良いのか。明治中期から大正前半にかけて、日本から多くの若者が北米へ移民し、その後、多くの苦難を経験した。過労や差別、約100年前のスペイン風邪、第1次世界大戦の戦後不況や排日移民法、世界恐慌、自然災害の大干ばつ、第2次世界大戦中の日系人強制収容など、数十年に及ぶ一連の惨禍が続いた。しかし、人々は人生を諦めなかった。

困難なときこそ、冷静に状況判断し、ピンチをチャンスに、ポジティブに捉え、ゲームチェンジすべきである。世界の国には第1波の感染拡大を抑え込んだ女性リーダーたちが登場した。我々も見習って、つぎの第2波以降への見通しをもち、新しい生活を手に入れよう。

教材 C「A MAN DID A CATCH-BALL WITH BABE RUTH ONE OF FAMILY HISTORY IN SEATTLE」(約4分半)

北米へ移民した日本人は、西洋式の生活習慣に憧れを持った。中でも、娯楽として流行ったものが、ベースボールであった。のちに、北米日系人野球の父と呼ばれたフランク福田藤吉がいる。多くの青年が彼の元で育った。筆者の親戚(河内(こうち)鹿次郎、岡山県出身、筆者の祖父の友人で曾祖父の三女と結婚)は、彼が勤めたシアトル正金銀行で福田と出会い、日系人セミプロチーム「シアトル朝日」の初期の左翼手として活躍し、第1回日本遠征ツアーにも参加した。(注、シアトル朝日の対戦チームは、米国西海岸の日系人だけでなく、白人系男性、黒人系男性、白人系女性や隣国カナダ(バンクーバー朝日))等のチームとも幅広く交流し、西海岸日系人リーグで数回、優勝した強豪であった。活動資金の調達のために、シアトル日本街の劇場・日本館で演劇興行を行い、選手が出演した。日本遠征は、3回行われ、実業家の渋沢栄一の屋敷にも招かれた)。とくに、大リーガーのベーブ・ルースがシーズンオフの巡業でシアトル市で興行試合を行った際にキャッチボールをする貴重な経験をした。1924年に銀行の閉鎖と福田のポートランド移住のため、チームはなくなった。一方、河内は1930年に渡米して来た早稲田大学チームの世話をして日米間を往復したりして、野球を通じて日系人社会に貢献し続けた。しかし、日米関係悪化のため、大戦前に河内夫婦は帰国した。その後、戦時中、12万人の日系人が強制収容所に入れられた。しかし、そのような苦境に立たされても、すぐに野球を始めた。野球は捕らわれた人々

の心の支えになった。その結果、野球場を持たない収容所はなかった。

4. 2 省察的授業実践

以下に、指導の流れを授業概要から振り返りに向けて述べる。

4. 2. 1 高校での概要

- (1)実習校 大阪市内の C 高等学校
- (2)日時・場所・人数 6/26(金)5・6 限 2 年 A 組 選択者 35 人
- (3)学年科目 2 年世界史 A
- (4)授業者 筆者
- (5)タイトル 歴史から人生を考える
- (6)準備 パワーポイント映像 2 種類と、同じ内容の配布資料 2 種類(構成 1 頁 4 コマ)
教材 A 「歴史から人生を学ぼう」
教材 B 「HOW DO YOU THINK OF THIS SITUATION WITH CORONAVIRUS」
持ち込み機器 PC、HDMI ケーブル、プロジェクターリモコン
教室備え付け 天井プロジェクター、スクリーン

(7)授業の流れ

- 13:20 着席指導、提出物の返却
資料配布(教材 A・B のパワーポイント資料とワークシートの綴じたもの)
- 13:25 開始の挨拶、出席確認
来校ゲスト(大学院の主旨導教員)の紹介
- 13:30 本時の予定説明 目的と目標、2 本の資料視聴の後、ワークシートに記入
- 13:35 1 本目の映像 手短に内容説明、視聴、事後に手短に振り返り・質問受付
- 13:45 2 本目の映像 手短に内容説明、視聴、事後に手短に振り返り・質問受付
- 14:05 ワークシート 手短に記入要領説明、残り時間で各自記入
- 14:15 休憩の挨拶
休憩時間(主旨導教員と展開の相談 あと 5 分記入継続と終了後の提出)
- 14:25 再開の挨拶
- 14:30 補足 黒板に教材 A の登場人物の関係系図を書き、解説。
- 14:40 普通授業 予習用にノートプリント 16 と 17 の配布と今後の見通し説明
ノートプリント 14 の空欄 13 から継続
- 15:15 終了挨拶、ワークシート提出

(8)ワークシートの問いに記された生徒の感想(表現は回答のまま)

問いは 3 種類であった。これらの問いは、2 つの映像を視聴することを通して、人生を送るにあたって、歴史的な困難に直面した中で得られる教訓に気づくように考えて、3 段階に順をおって考えを発展できるように配置した。

1 はじめの映像で、印象に残った人物はどのように生きていたか

2 次の映像で、今の状況で世の中によい影響を与える人々はどのように活躍してるか

3 これから生きて行く上で大切だと分かったこと

記入にあたって、生徒に次のような説明を行った。「答えはひとつではない。個人によって注目する人物の行動は違い、導きだされる教訓もさまざまでよい。今後、あなたがた個々の課題解決に向けて、多様な応用や転移を期待する」

(注.生徒の感想において、下線部は授業で 21 世紀型スキルを習得する場面で有効と考えた。21 世紀型スキルとは、OECD で 2030 年度の社会を支えるために青年が身につける必要があるとされた資質・能力(キー・コンピテンシー)。日本の新学習指導要領における学習の 3 要素(「知識・技能」「思考力・判断力・表現力等」「主体的に学習に取り組む態度」)は「メタ認知」を加えて OECD の「教育の 4 つの次元」が元になっている。従って、コロナ禍での不確実な状況において、個々の課題解決に向けたレジリエンスに繋がると判断し

た)

下線部の後にある区別の意味は、T は教師から提示した視点、S は生徒からの視点。

(8-1)はじめの映像で、印象に残った人物はどのように生きていたか

曾祖父 1・・・家族を出稼ぎに導いた

曾祖母 1・・・この時代は感染症が大変だった

長女 1・・・夫を亡くして一人で娘 2 人を育てた、大変だったろうな

長女の夫(兄弟の弟)1・・・死因がコロナウィルスに似てるから心残りだったろうな、過労と書いてあったので仕事をすごく頑張った人だったのか

姉妹の姉 3・・・父親の記憶がなかったのに長年父親のことを思って生きた

自分の父のことを知りたいと思う気持ちが素敵だ

父の記憶がないから英語をたよりに父の思い出を探してほしいとたのんだ

姉妹 2・・・幼い頃に父を亡くした。父親の記憶が無いって、私には考えられない

お父さんを失い、お父さんのことを思い出したいのに、幼かったため記憶がなく、お父さんのことを知りたいのに、国の壁などで知ることもできなかったため、ずっともどかしかっただろうな

兄弟の兄 3・・・アリゾナ州の砂漠のポストン強制収容所でコックをしていた人。

収容所でコックをして生涯を終えたと思うと悲しくなりました。

それと同時に自分の役目をまっとうして亡くなったのはすごくカッコいいことだ

アリゾナ州の砂漠のポストン強制収容所に入れられたときいて、大変なのは病気だけじゃない T ことが当時を想像して辛くなった

兄の息子 14・・・夢を諦めない姿勢が素直にすごい T

強制収容所に入れられ、満足に学ぶことができなかったが、人生をあきらめずエンジニアになった T

最終的に取り残されても諦めずにエンジニアになる夢に向って前に進んだ T

ひとりぼっちになってしまったにも関わらず、人生を諦めずにエンジニアとして働くために頑張ったり T、大切な女性とも出会えて尊敬できる生き方だな

どれだけ過酷でも、諦めずにエンジニアになったり、何年かかっても弟を探し求めたりしてとてもすごい人だな T

ひとりぼっちで生きていたが、努力したおかげで愛してくれる人が見つかった。あと優しい S

家族と離れてひとりぼっちだったのに、自分の夢をあきらめることなく最終的に幸せになっていて、人生の追い返しがすごい S

希望を捨てずにアメリカ空軍のエンジニアになったのはすごい T

エンジニアという夢を厳しい状況の中で叶えたことが素晴らしい T

ずっと家族を探して生きてきた

ひとりぼっちで残されて、母も弟もどこへ行ったかわからなかったが、アメリカのエンジニアとして働くチャンスを得て 1990 年には再会することができた

後々、母が認知症になってしまって、弟のおかげで最終会えた

ひとりぼっちになってしまったが、最終的には結婚もし、またインターネットを使って行方不明だった母と弟を見つけることができた T 兄の人生が印象に残った

信じて努力さえすれば行方の知らない人にも会うことができる T

兄の息子の息子 1・・・ネットをつかって、時間はかかったけど、繋がることができすごい
アメリカの親戚を探した人 4・・・「探してほしい」と頼まれたけど「まるで太平洋の大海原に落とした 1 本の小さ縫い針を探すようなものだ」と思っていたのに、諦めずに探し出したのはすごいな T

連絡を取り続けていた人はとても親切なんだろうな

80 年も前に連絡がとれなくなった家族を探し出そうと思ったのがすごいな T

諦めずに彼女の失った思い出のために頑張りを続けた T

ほか、今から 100 年、200 年ものあいだで色々なことが起きすぎた。病気の流行だけでなく戦争や自然災害など T です。私の先祖は今の時代を作るための過程だ。T

(8-2) 次の映像で、今の状況で世の中によい影響を与える人々はどのように活躍してるか自分のやるべきことをはっきりと理解して、すぐに行動にうつしている

今までの固定概念がなく新しい物事をしようとしている

女性のリーダーが早い段階で対策していたのは、国民のことを考えていて素晴らしい
大阪で言ったら、大阪府知事が様々な取り組みを行っていて大阪モデルを立ち上げたり、感染拡大防止の取り組みをしているからこそ、スペイン風邪みたいに感染拡大を抑えることができていいるなあ

家に居る自粛している人は一人一人ががまんすることで感染者を増やさない

自分のためでなくて、みんなのためにお金を寄付したりしている S

現実には立ち向かいながら、弱い立場の人々の支えになっている

医療従事者の人々はコロナにかかってしまった人たちのために身を削りながら働いてくれている

色々な人が頑張っている中で常に危険と隣り合わせ仕事をしている人は病院の先生だ

歴史を知って、今何ができるか、取り組むことで考えて行動している

女性もリーダーシップをとれる時代になった

黒人の看護師さんは社会的に身分が低い？にもかかわらず、コロナで苦しんでいる人々や差別されてきた白人も救っているように、どんな人でも助けたいと思っている T

未来のことまで考えて行動している S

周りの出来事を自分の得にできる。自分が黒人であるとか関係なく給料以上の仕事ができる

広い視野をもち、問題にしっかり向き合っている

自分の脳をフル回転して世の中にいい影響を与えている

自分の知識をふりしぼってものごとを考え、活躍している

自分だけの力でなく、周りの人の力も借りて最善を尽くしている

(8-3) これから生きて行く上で大切だと分かったこと

多数意見 諦めない 14

少数意見 6

命を繋げる、命を伝える、命の大切さ、家系を途絶えさせない、
感染しない、健康に家族と友人を大切に感謝して生きる、乗り越える、長生き
未来を変える、未来を信じて取り組む、夢を大切に、現状を理解する
先祖や世界を知る、世界へ目を広げる、広い視野をもつ
つながり、挑戦する、人脈を大切にする、
ご先祖さまのことをもっと知りたいと思った

(8-4) 生徒の 5 段階評価

授業の最後に、生徒 35 人に映像と授業について 5 件法で評価を記入させた。

	5	4	3	2	1	平均値
はじめの映像	8	13	8	3	0	3.81
次の映像	7	12	9	3	1	3.66
全体を通して	6	14	10	2	0	3.75

結果 この表から分かることは、評価は概ね 4 に近かった。アンケートから、映像からの学びが多いと分かる。コロナ禍でグループワークができなかったのも、休み時間の交流の機会を通じて理解が促進された可能性がある。しかし、それでも、生徒の理解は非常によ

く分かるレベルには、至らなかった。

(9)筆者の振り返り

(9-1)コロナ禍での状況

コロナウィルス対策のため、6/1(月)からクラスを午前午後の奇数組偶数組 20 人ずつに分けての分散登校開始、6/15(月)から普通授業再開であったため、本授業の授業進度は 2 カ月遅れであった。

生徒には、校内でのマスク着用を義務づけ、手洗い、うがい、ソーシャル・ディスタンスなどについて、保護者向け資料の配布と口頭で協力を求めた。また、休み時間でも話できるだけさせない、昼食時も対面での食事は避けるなどの指導を行った。

全生徒に文部科学省から布マスクを 2 回、教育委員会からフェイスシールドを 1 回配布した。アクティブラーニングを行う場合や集会での密を避けられない状況では、フェイスシールド着用の指示を出すこととなっていた。

生徒の座席配置は、コロナウィルス対策のため、教卓の最も近い直前の席は使用しない。また、教室の 1 列目も使用しないのが望ましい。生徒の間隔も 1 から 2m 離すのが望ましいが、現実的には 1m がせいぜいであった。話をしないで同じ方向を向けて着席させる指導も行った。

本時は、週末の疲れが出やすい金曜の眠気が起きやすい 5・6 限であった。

生徒の様子として、今年度、世界史 A を 3 クラス担当する中で、最大の 35 人であった。アプリケーションの Edmodo について、コロナ対策での導入のため、その設定を 5 月半ばにプリント配布で指示をした(注. Edmodo は、世界最大の教育 SNS で、コロナ禍において、大阪市立の高校では、英語科教員の間で活用されはじめた。日本での事業パートナーは Z 会。学習指示・教材提示・課題提出など、教師・生徒間のコミュニケーション・ツールとしての活用が期待された。使用するためには、ネット環境にあるスマホやタブレットでの個別登録が必要であった)。さらに授業で 2 回、操作について配布資料と口頭で指導した。しかし、未だに登録を終えていない生徒がおり、名前を指示通りに修正できていないで放置している生徒が半数近くいた。できない操作を質問して、できるまで仕上げる力が弱い。他のクラスに比べて、Edmodo 登録の状況や休み中の課題提出などの状況から判断して、学習意欲と推進能力が低く感じた。時間帯が金曜午後のため、居眠りも多い。生徒の特徴として、表現力が弱い。答えを教材の枠組みや文中から選ぶことはできても、自分の言葉にまとめたり、翻訳したりして答える力は乏しかった。

教師の状況について、教育委員会からの通達で、コロナ対策で感染抑止のため、教職員は校内でマスク着用、HR 指導や対面授業では原則フェイスシールド着用であった。運用上、暑さや湿度、体調を判断して適宜外してもよかった。現状として、マスクの上にフェイスシールド着用では、通常よりも声を意識して大きく張らないと、後ろまで聞こえないので、普段以上に疲れる気がした。また、他の職員を観察して、フェイスシールドを率先して着用しているのは授業者(筆者)しか見受けられなかった。

週末の午後授業のため、生徒は集中力に欠け、意欲も感じられないので、一生懸命説明すると、さらに時間がかかり、進度が遅れぎみになる上、自身の疲れが増して悪循環に陥った。

授業については、通常の間中間考査の範囲を、自宅待機期間での課題として取り組ませた。6 月からの分散登校以後は、例年の中間考査後の範囲から進めており、このまま再び自宅待機が行わなければ、年度内にほぼ例年の通り終了できる見込みであった。また、再度の自宅待機が懸念されるため、Edmodo を活用した課題配信や提出などの操作練習を適宜導入する必要があるが、授業時間内に設定する余裕はほとんどなかった。現状では、学年のロングホームルームなどでの時間を割いて操作練習するなどの工夫が必要であった。この状況は文化祭についても同様であった。

(9-2)教材に関する生徒の視点について

①1 本目の教材 A について、生徒は 6 分間結構、目を向けて見ていた。しかし、登場人物の関係を認識するには時間がかかり、個人差が出た。ワークシートでの記入状況から判断して、2 時間目に黒板に系図を書いて説明したあとでも、誤って認識したまま思い込んだり、質問で確認せずに放置したりして、記入したと思われる例も目立ったので、周知できたとはいえなかった。従って、理解を促す工夫として、次回までに予めパワーポイント資料のはじめと終わりに登場人物の関係系図を挿入する。授業後の土曜に自宅で大学院生の長男に見せると、同様の考えであった。

②2 本目の教材 B について、生徒で最後まで集中して視聴できたのは数名であった。とくに座席の左右前列 2 列目あたりまでは眠気を催した生徒が多かった。2 本目で緊張が緩み、英語での資料で、英語でのナレーションがさらに眠気を誘うトーンであった。元々、英語の理解力は高くないので、視聴前から諦めて寝ると決めていたのかも知れなかった。また、配布資料の各画像の上に、日本語で概説があるので安心したことも考えられた。また、内容として、日本語でも難しい話題で、最後に向かってさらに大人でも答えにくい内容に向かったもので、逆に最後まで集中していた生徒には遅しさを感じた。

(9-3)実践者(筆者)の感想

①学習開発研究演習(英語)の講義で、教材化に約 1 カ月要した成果物をもとに授業を行った。出稼ぎ移民の苦難やスペイン風邪の話題は、卒業させた生徒たちにも、毎年ある時期になると必ず話してきた。今回、映像資料として初めて導入した。成果物は当初、英語で作成されたので、高校生には理解しにくいと判断し、翻訳することにした。翻訳には夜間に 3 日間を費やして間に合わせた。

②1 本目の教材 A は、日本語ベースであったので、生徒の集中度も 2 本目の教材 B に比べて高かった。翻訳のために徹夜した甲斐があった。しかし、開始前と終了時に、人間関係について系図を挿入する方が、さらに内容理解を促進させると感じた。同時に、登場人物が親戚とはいえ、個人情報保護の観点から、必要以上に情報を提示しないように配慮することが必要である。

③生徒の反応は、視聴とワークシートでの様子から判断して、筆者が期待したよりも全体的に薄い。期待していた範囲に近い生徒は 3 人程度であった。この状況は、成績上位者と重なるのではないかという仮説を想起した。生徒の状況として、少子化や年齢的な関係で、社会経験が少ないことが関係するのか、単に学習能力としての表現力の不十分さなのか、来週以後の時間経過を経ると心境に変化が出るものなのか、2 学年のあと 2 つのクラスや、3 年日本史 A の授業でも時期を見て実施して、比較検討してみたい。

(9-4)主指導教員からの指導により、今後の展開へ繋げた内容

①2 本目の教材 B で、英語表現の修正

②振り返りで、1 本目の教材 A スペイン風邪での搬送写真をフォトランゲージの手法で、生徒に今のコロナウィルスのニュースで見たことのある写真と比較させて、共通点と違いを述べさせる。時間は、長くなり約 10 分間となった。

③振り返りで、1 本目の教材 A と 2 本目の教材 B で、グラフから、昔と今を比較させて、共通点とちがいを述べさせる。

④振り返りで、2 本目の教材 B の最後に、今のコロナ対策に必要な指標の実効再生産数に



ついで言及し、抑制と発展のバランスが大切だと気づかせる。

(9-5)実践のまとめ

実践の結果から得た示唆は、授業モデルとして、教材の選定、時代考証、問いづくり、知識理解、映像の用い方、教師の視点について説明可能なキープフレーズ、21世紀型スキルの習得、著作権の遵守、作成上の社会認識、話題のタイムリーさ、生徒の感じる身近さ、生徒の成長過程。筆者の高校でのミドルリーダーの立場から、教材開発の視座は教員研修で活用できるなど、多くの学びを得ることができた。そして、大学の教職課程で学ぶ学生にも、多くの学びを提供できると考えるに至った。さらに、高校生と大学生の共通点や相違点を知ることが、高校・大学の連続的な指導の過程での筆者の学びに繋がると考えた。

4. 2. 2 A 大学での概要

(1)対象 A 大学の教職課程の学生

(2)日時・場所・人数 10/17(土)2・3 回生選択者 8 人

(3)学年科目 地理歴史科教育法Ⅱ

(4)から(6)は前述と同様

(7)使用した教材

視聴した教材は、主指導教員からの指導を反映して修正を加えたあとのものである。

(8)記録

(8-1)はじめの映像で、印象に残った人物はどのように生きていたか

姉妹・・・1 父親を亡くし、父親に関する記憶がない姉妹は、歴史の被害者であると感じた S
兄弟の兄・・・1 寡黙で収容所ではコックだった。戦後、亡くなった。

兄の息子 4・・・厳しい環境下においても、絶望せず、エンジニアという夢に向かって奮闘して生きていた。

母や弟のことも知らず、父は強制収容所で働くという、今では考えられない環境だと思いました S。それでも、エンジニアという仕事についていたことも尊敬しました。

過酷な状況に置かれていたにも関わらず、人生を諦めることなく夢を追い続けていた。

単身、アメリカに残され、エンジニアを夢みた。困難だったが、空軍のエンジニアになった

兄の息子の息子 1・・・インターネットで行方不明だった母と弟を見つけ出して再会できた

(8-2)次の映像で、今の状況で世の中によい影響を与える人々はどのように活躍しているか
流行する感染症の恐ろしさを SNS 等で発信している人々のことを思いました S

自分が置かれている状況の中で、最善を尽くすことができる人 S

何かをプラスに変える人は行動力があると感じた S

どのような困難にさいなまれようとも、絶対に諦めない人物 S

(8-3)これから生きて行く上で大切だと分かったこと

流行する感染症や強制収容所等で辛い経験をした子孫の存在を知ることが、自分の知らない歴史について学ぶ上で重要に思った S

人生は死なない限り、諦めなければ良い方向へ進むことができる可能性があるということ S

行動力と勇気が必要であると思った S

困難にあっても諦めずもがいていく心 S

諦めないということ、とりあえず行動してみると、良くも悪くも必ず何かが起こる。その結果が今後のモチベーションにつながる S

教員というのは勉強を教えることが第一の仕事にされがち。でも、勉強よりも大事なこと(ex.人としての道など)を教えることが、まず土台にあって、それがあっての勉強だと思う S

「歴史から人生を考える」ことは歴史を勉強する上で大事であるが、私は身近な家族の歴

史を勉強しようと思ったことがなかった。この動画を見て、歴史を学ぶことの新たな重要性や意味を伝えられるような授業をしたいと思った S

このビデオでは、一度は離れてしまった家族が国や長い年月を越えて再会できたということに対して、とても心が熱くなりました S

(8-4) 学生の 5 段階評価

授業の最後に、学生 8 人に映像と授業について 5 件法で評価を記入させた。

	5	4	3	2	1	平均値
はじめの映像	4	0	1	0	0	4.6
次の映像	2	0	0	0	0	5.0
全体を通して	3	0	0	0	0	5.0

高校生と比べて、大学生の評価は高く 5 に近い。基礎的な歴史的知識や人生経験に照らし合わせて、内容理解や共感を得るものが大きかったと考える。教材 B は、英語のナレーションで、使われた英単語は大学入試レベルであったので、ほとんどの学生が理解できた。

(9) 講義の様子

担当の講義は後期土曜 4 限であった。ZOOM は主催者の資格を春休み中に取得していた。大学からの連絡で、後期からの対面形式と知ったが、自宅待機者への同時配信も想定した。油断せずに、ハイブリッド形式でも慌てない準備をした。理由は事前に配慮が必要な学生への対応について、連絡が入ったからだ。ZOOM 講義は、すでに夜間大学院で経験済みであった。大学の指示に従い、講義初日からマスク、消毒等につとめた。教室では、消毒、学生の分散座席や体調や、間を置いて質問の確認等行い、次第にペースを掴んだ。

(10) 実践のまとめ

とくに、教材 A「歴史から人生を学ぼう」の映像について、高校生と大学生の違いについて、指摘できることは、視聴した時期や、発達段階の違いがあるため、両者には、出来事に対する認知の内容や、人生経験や教養の点で差が見られた。記述する表現において、高校生は多感な時期にあるため、直接的表現を用い、直感的に受け取っていた。一方、大学生は、比較的意味深い単語を使用し、人生の変化を俯瞰し、その機微に触れている思考の深まりが感じられた。

他方、共通する点として、歴史上、人々が遭遇した困難を、現在のコロナ禍に置き換え、諦めないで最善を尽くす事の大切さについての学びが見られた。

さらに発展的に考えると、どのようなことを諦めないのかについては、個人によって答えが違ってくることである。問題に対する答えはひとつではなく、次への転移も起きる。

今回の取り組みから得た示唆は、2 つであった。ひとつめは時事的題材を活用する大切さ。ふたつめは新学習指導要領にある探究的学びに繋がること。

今回は、新型コロナウイルスの流行に対比される、スペイン風邪の流行について、当時の感染者への看護の様子や、国別・地域別死者数の推移のグラフや、国・地域の都市封鎖の時期と感染者数の変動について先に取り上げた。その次に、現在の新型コロナウイルスの流行に直面する各国・地域の対応や、新たな取り組みとして、大阪モデルや、感染予防学の感染者数モデルについても提示した。

今後は、これらの映像を、地理歴史科・公民科の教員研修で用い、教員間の交流からさらに学びを深めたい。

4. 2. 3 日系アメリカ人研究員からの感想

(1) 経緯

筆者は、作成した教材を、アメリカで教育を受けた日系アメリカ人の何人かに見せて感想を聞き、さらに改良したいと考えた。しかし、コロナ禍では、日系アメリカ人の留学生を容易に見つけることもできない状況であり、その労力は勤務校の生徒のために優先的に使いたかった。

その後、筆者は、長男から、C大学の大学院文学研究科地理学専修の研究室に、日系アメリカ人が研究生としてやって来ることを知った。その人物は、アメリカ合衆国のユタ大学院で美術を専攻し、建築学の修士課程を修了した日系人女性であった。彼女の両親は、第二次世界大戦後に渡米した新一世で、彼女は現地で生まれ育ち、高校生のときに2年間、大阪府内の公立高校に在籍した経験を持つ。日本語の運用は日常会話ができる程度である。つまり、彼女はユタ州の日系人としての視点を持つ半面、日本での高校生としての視点も持ち合わせる珍しい存在として期待できる。言い換えると、視点の比重はアメリカ寄りでも、日本からの比較の視点も期待できると筆者は考えた。

そこで、筆者はパワーポイントの教材3つをUSBで長男に託し、いつ研究室を訪れるとも知れない彼女に見せる機会を期待した(3つめの教材は、親戚が選手として参加していた、日系人野球チームの「シアトル朝日」の活躍と、どここの強制収容所でも日系人は野球場を造った話)。そして、11/2に幸運にも実現した。

(2)交流からの学び

長男は、彼女に、自分の先祖がアメリカのシアトルに出稼ぎ移民に行っていたことや、まだカリフォルニア州に残っている親戚について、父親のつくったパワーポイント資料を見せることができることを伝えた。彼女は、今はパワーポイントを見る時間がないので、あとでゆっくり見たいとの申し出を受け、3つのパワーポイントを彼女のPCにコピーした。

帰宅後、長男が筆者に語ったことは、4点であった。彼女は地元の高校からのフィールドワークで、同じユタ州にあるトパーズ強制収容所の史跡を訪れた経験があること、トパーズ強制収容所出身で有名な画家にミネ・オオクボがいること、ポストン強制収容所は行ったことがなく、そこの出身に世界的に有名な画家のイサム・ノグチがいたことを初めて知ったこと、であった。

以下、彼女から長男に送られてきた、パワーポイントを見た時のコメントの抜粋である。「先週は日系人のご親戚のことを教えていただきありがとうございます。パワーポイントをもう一度読み、とても興味深く思いました。家系図を辿ると歴史の流れが非常によく分かりますね。戦前、戦時中、そして戦後の日系人は多くの困難に直面しながらも、日本の家族への思いは強く残ると聞きますが、今回はその反対側の日本国内にいる人の思いにも気づかされました。また、このような歴史を聞くと現代の日本人は何を感じるのかにも興味があります(柴田さんのお父さんの学生など)。色々と面白いお話ありがとうございます。またの機会を楽しみにしております！」

また、以下は後日送られてきた追加コメントである。

「柴田さんのお父さんが熱心にご親戚の過去を追跡したことがよく分かります。シアトル朝日のことも知らなかったもので、勉強になりました。今後も日本の教育の中でこの歴史のことも広く伝えられていく事を願っています。」

(3)コメントからの学び

日系アメリカ人の歴史について、現代の日本人は何を感じるのかについて、筆者が得た結果を彼女に伝える義務を感じた。筆者の家族は、日本から北米へ出稼ぎ移民後、世界恐慌前に帰国した側である。しかし、親戚には、暫く残留して、第二次世界大戦直前に帰国した親戚や、そのまま北米に残り、強制収容後も住み続けている家族も数軒ある。個人の特性や時代との関わり等は、日本に生きる各世代にとっても、北米で生きている1世、2世にとっても、個人の人生を織りなす要素である。そのため、一口に日系アメリカ人といっても、個人的な経験や立場、主義主張によって大きく違いが出る場合もある。従って、ステレオタイプ的な画一モデルのように、予定調和的なものにするのではなく、まず、多様で、ありのままを受け入れる態度が大切である。

5 考察と今後の課題

教材の視聴を通じて、高校生・大学生・日系人研究員におきた、それぞれの変化を考察することができた。三者三様で、高校生は青年後期の成長プロセスの中から、大学生は成人としての自覚の中から、日系人研究者は日系人側から、日本とアメリカとに分かれた出稼ぎ移民の家族の変遷等からの学びについて知ることができた。

並行して、映像資料を作成する難しさも学ぶことができた。今後、過去の日系人に関する映像資料を多く視聴し、筆者の知見を発展させる必要を感じた。

改めて気づいたことは、多文化共生には、インクルーシブ教育や SDG's 等とも共通する価値観があることである。それは、日本人対〇〇人の対峙的な視点ではなく、個人をそれ以上分けることができない単位(individual)であり、社会の構成単位として、多様性を尊重する相対主義的な価値観である。

また、今回の教材には探究的側面があった。令和 4(2022)年度、高校で本格実施となる新学習指導要領の「歴史総合」にも活用できる。未来をつくるため、過去から学び、生徒の「学びの3要素」の育成をめざしたい。そのために、筆者が重要と考えることは、大学の教職課程において次代の教育を担う優秀な教員を養成することである。

暫く、新型コロナウイルス感染症の流行は続くだろう。今後、第3波以降の動きに注視し、教材 B を発展させる必要がある。

私たちに大切なことは過去から学ぶと同時に、いままさに、歴史を刻んでいると気づき、より良い選択をして、困難を乗り越えることである。池上彰氏は、講演「池上彰と考えるコロナ禍、その先の教育」の中で、このように述べている。「感染症は世界を、あるいは日本を変えてきました。そしてまさにいま、新型コロナウイルスという感染症で、日本や世界の歴史がつくり替えられようとしている。2020 年は悲惨な 1 年でしたが、新しい理論や芸術作品が生まれてきます。私たち自身が 21 年以降の歴史をつくっていく。そんな観点で、これから生きていくことが大事だと思うのです」

人生は、「Not always, Not Only」(いつも同じとは限らない、方法はひとつとは限らない)である。困難を乗り越えるために大切なことは、「備えよ常に」で、変化を学び続けることである。

最後に最近、コロナ禍の巣ごもりの影響で、小麦粉不足の代用品としてオートミールがブームらしい。筆者も約 58 年ぶりに試した。意外とおいしいものだった。

(日本移民学会、マイグレーション研究会会員)

おもな参考文献

池上彰 (2020)、「池上彰さんが語るコロナ禍の教育 「自ら歴史をつくる観点を」、『朝日新聞 EduA』、2020.12.13

森茂岳雄 (1999)、『多文化社会における国民統合と日系人学習』、明石書店

森茂岳雄・中山京子 (2008)、『日系移民学習の理論と実践 グローバル教育と多文化教育をつなぐ』、明石書店

画像の出典：ウィキペディア「スペイン風邪」

<https://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%82%B9%E3%83%9A%E3%82%A4%E3%83%B3%E3%81%8B%E3%81%9C>, 2020 年 6 月 21 日